

Hippophile

ヒポファイル

No. 31



目 次

馬事往来

- 馬と歯と人間の大事な関係 II. 歯科の主な目的, 切歯と犬歯について ..新木 美絵1
ウマ大国は“やっぱり”土佐だった長山 昌広8
「馬力」による地域活性化.....古林 英一.....11
ミニホースの会田中 義朗.....16

特別記事

- 世界のドラフトホース (7) ハンガリー, 海外総集編および日本の農用馬 ..柏村 文郎.....21

総説

- 馬インフルエンザ—36年ぶりの本病の発生に遭遇して—.....今川 浩.....28

- Journal of Equine Science Vol. 18, No. 4, December 2007 和文要約35

- 賛助会員名簿37

- Hippophile 投稿規程38

編集後記

Hippophile No. 31

- 編集委員 -

編集顧問	林 良博 (東京大学)	
編集担当常任理事	局 博一 (東京大学)	
編集委員長	兼子 樹廣	
編集委員	石田 信繁 (JRA 総研)	田中 義朗
	近藤 誠司 (北海道大学)	沼田 恭子 (イグレット軽種馬フォスターペアレントの会)
	末崎 真澄 (馬の博物館)	松尾 圭 (日本軽種馬協会)
	杉本 篤信 (地方競馬全国協会)	三浦 暁子 (エッセイスト)
	高松 勝憲 (JRA 馬事部)	山野 浩一 (作家)

表紙絵：騎手 (The Jockey)：アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック (1864-1901) 1899年 49.8×34.1センチ多色刷りリトグラフ 馬の博物館蔵

「騎手」は、晩年に近い療養中に一連のサーカスシリーズとともに表した作品である。ロートレックは、少年の頃に父親とともに乗馬をし、競馬場にもしばしば通った経験があり、晩年に再びその情景を思い巡らしている。後ろ姿の騎手は、あるいは馬と競馬を愛した父と自分の姿を映し出しているのかもしれない。

日本ウマ科学会

Japanese Society of Equine Science

馬事往来

「馬力」による地域活性化

古林英一



古林英一（ふるばやし えいいち）

1958年兵庫県生まれ。北海学園大学経済学部教授。1987年京都大学大学院農学研究科農林経済学専攻博士課程中退。南九州大学園芸学部、北海道大学水産学部を経て2000年から現職。1999年から軽種馬生産費調査委員。2001年10月～2003年9月北海道地方競馬運営委員。2007年8月からNPO法人とかち馬文化を支える会理事。

hippophileたち

当誌の誌名になっているヒポファイル hippophile を手元のランダムハウス英和大辞典で調べると「愛馬家、馬好き」とあった（小さな辞書には載っていないようだ）。筆者は英語に疎いので受け売りになってしまうが、hippophile というのは単なる愛馬家というレベルではなく、馬のことになると我を忘れてしまうような人のことをいうのだそうだ。記憶が定かではないが、ウマ科学会のときに装蹄師会の青木先生がそのようにおっしゃっていたように思う。

愛犬、愛猫、それに愛馬というのは耳に馴染むが、愛牛や愛豚というのはどうも耳に馴染まない。十数年以前のことだが、徳之島の闘牛愛好家を訪ねたことがある。畜産経済を専攻している友人に付いていっただけなのであるが、彼の地の闘牛愛好家の熱意は聞きしにまさるものであった。強い牛とはどのような牛かとその愛好家に尋ねたところ、残念ながら内容は忘れてしまったが、いくつかの条件をあげてくれた。

続いて別の愛好家を訪ね、今度はこちらから先ほど聞いた強い牛の条件をあげ、「こういう牛が強いのだそうですね」と言うと、その人は「それは〇〇（先に訪ねた愛好家）のところで聞いたのか？ そんなことを言っているから〇〇の牛は弱いのだ」と、別の条件を教示してくれた。「超」のつく愛好家というのはこういう人たちである。おそらくスペイン語などには愛牛家に相当する言葉があるのではなかろうか。

筆者は hippophile にはほど遠いが、馬の世界を徘徊すると、上述した闘牛愛好家のようなことはしばしば見聞する。まさに hippophile そのものの世界である。

デコトラとスポーツカー

現代日本の hippophile たちが最も密集しているのは、当然のことながら、競馬の世界であろう。しばしば競馬は貴族のスポーツであるといわれる。まことに残念なことながら、筆者には英国貴族に親戚も友人もいないので、確たることはいえないが、ものの本によれば英国貴族たちは持ち馬を自らの所領の山野を駆けさせて優劣を競ったという。そのために、優秀な馬を求め、優秀な調教師や騎手をお抱えにしていた。

彼らが求め、そして作り出してきたサラブレッドは、いわばF1レースで使用される車のようなものである。鉄道や自動車が発明される以前、馬の持つスピードは他に代え難いものであり実用的な意味を持っていた。ヨーロッパにおける中世の騎士、モンゴルから世界を制覇した大蒙古帝国の戦士達、わが国においては源平合戦の騎馬武者たち、優れた馬は優れた武器でもあった。

だが、鉄道や自動車が発明されて以来、馬の持つスピードは実用上の意味をほぼ失ったとっていいだろう。その意味において、英国貴族たちが作り出してきたサラブレッドはもはや実戦的・実用的な馬とはいえない。

金にあかせて非実用的なスポーツカー・スーパーカーを求める人たちがいる一方で、自分の仕事の道具を飾り立てる人も少なくない。派手に飾り付けた大型トラックを見かけることがある。デコトラ（デコレーション・トラック）というのだそうだが、デコトラのオーナーにとってのトラックは、既に単なる仕事の道具という域を超え、もはや彼らのパートナー的な位置づけになっているのであろう。

物言わぬ（いや、彼らにとってみれば十分ものと言うのかもしれないが）トラックでさえ、人のパートナーになりうるのである。血の通った生き物である馬とともに生きる人にとって、馬はパートナーそのものであろう。

かつてのわが国の競馬、とりわけ地方競馬はスポーツカーではなく、デコトラのレースであったことがわかる。

1946年地方競馬法が施行された。地方競馬全国協会が発行した『地方競馬史』を繙くと、全国の地方競馬の沿革が記載されている。それによると、驚くなかれ、沖縄を除くすべての都道府県で第二次大戦後地方競馬が開催されていたことが記されている（沖縄県については米軍の軍政下にあったことが理由だと思われるが記載がない）。当然のことながら、競馬をやるためには競馬場も必要である。全都道府県で競馬を開催するだけの馬と人と場所があったということである。

だが、1946年の軽種馬生産頭数はわずかに541頭。1950年でも1,052頭に過ぎない。いくら各地の開催日数が少ないとはいえ、この生産頭数で全国すべての競馬場で競馬を開催することができるはずもない。つまり当時の地方競馬はその殆どが軽種馬以外の馬による競走だったのである。

当時全国各地に存在する hippophile たちが自分の愛馬を持ち寄り、おのが技量を競い合う。これが地方競馬だった。こうした形態が最後まで残ったのが輓曳（ばんえい）競馬だった。輓曳競馬では1970年代に入る頃まで馬自慢・腕自慢の男達によって競馬が開催されていたのである。

産業動物としての馬は同時に競走馬でもあったわけだ。産業現場で活躍した馬は中高年の人々の記憶のなかに刻み込まれている。昨年、輓曳競馬の存廃問題が持ち上がったとき、筆者も存続請願の街頭署名活動に参加した。そのとき、署名に応じてくれた人々のなかには、「懐かしい」、「うちでも飼っていた」という感想をもらす人たちが少なからずいた。北海道は馬の大地であったことを改めて実感させられた次第である。

地域資源としての馬

さて大都市圏と地方との経済格差が問題となっている。ある有力政治家が街頭演説で「東京は世界と闘っているのだから」と発言しているのをテレビで見た。

世界と闘わざるを得なくされ苦闘しているのはむしろ地方である。経済のグローバル化のなかで農林水産業をはじめ多くの地場産業が苦闘を強いられてきたことをご存じないのだろうか。

それはともかくとして、昨年、輓曳競馬の存廃が大きな話題となったとき、撤退を決めた3市が揃って喧伝したのは「第二の夕張になるな」であった。これ以上財政赤字を増やしたくないという当局者の気持ちはわからないでもない。夕張市の財政破綻の原因がバブルに踊らされたハコモノ行政にあったことは周知のとおりである。夕張だけではない。道内各地で相次いで建設された温泉施設の殆どは軒並み赤字であるという。

だが、輓曳競馬はリゾート施設や温泉施設などと同列に論じていいものだったのだろうか。輓曳競馬は世界に類例のない馬事競技であり、そこには北海道の歴史があり、馬文化があったはずである。長年にわたり蓄積された資源や技術を多面的に活用し、新たな展開をはかることは不可能だったのだろうか。これは、輓曳競馬に限らず、大なり小なり地方競馬全般についていえることだと思う。

JR岩見沢駅の構内には馬具を装着させた輓馬の銅像がある。また、道央高速道路で岩見沢市にはいったことを表す看板がある。そこには輓曳競馬の絵が描いてある。これらは輓曳競馬が岩見沢市のシンボルであったことを示しているはずだ。そのシンボルを行政当局はいとも簡単に捨て去った。

また、輓曳競馬廃止の牽引役になったと目されている旭川市には、かの有名な旭山動物園がある。旭山動物園の人気は未だ衰えない。入園者数日本一であるという。特に変わった動物が飼育されているわけではないにも関わらず、人口30万人そこそこの市立動物園が日本一なのである。そう考えると、世界の珍獣を集めている大都市の動物園は一体何をしていたのだろうかと逆に思ってしまう。特に珍しい動物がいるわけでもない動物園を日本一にすることができるのである。

旭山動物園の成功は大いに讃えるべきである。だが、ある意味で当然のことであるが、動物園という性格上、その基本的資源、すなわち飼育されている動物たちは地域に内在したものではない。地域に内在する資源でない限り、その成功は比較的容易に他に移転させることが可能である。旭山動物園の成功は、動物の展示方

法などの改善によるものようである。もちろん、それを見事に実践しうるような人材を育成することは一朝一夕には不可能であろうが、ノウハウを移転することは十分可能なはずである。旭山動物園の成功にケチをつけるつもりは毛頭ないが、地域に内在する資源に立脚していないということは、それだけ他との厳しい競争にさらされているということでもある。

輓曳競馬の存続をもたらした要因はいくつか指摘しうる。だが、最も根幹をなしていたのは、北海道十勝地方を中心に、全国に広がった存続を望む市民の意志であったといえよう。そして、その広範な市民の意志を立脚基盤として数多くの hippophile たちが懸命の活動をおこなった結果、奇跡的ともいえる存続が果たされたのである。存続を望む市民の声は、おそらく、廃止を企図した行政担当者の想定を超えるものであったろう。

ここで重要なことは、皮肉なことに、輓曳競馬廃止という動きが起きなければ、輓曳競馬という営みのもっている大きな価値にわれわれが気づかなかったかもしれないことである。まさに輓馬の馬力は侮れないのである。

ここでいう大きな価値に気づいたということは、輓馬と輓曳競馬という営みが北海道十勝地方に内在する貴重な地域資源であり、これを地域活性化のツールとして活用しない手はないのではないかという機運が醸成されたことである。

輓曳競馬存続運動の特筆すべき特徴は、競馬関係者ではない人々がその担い手として活動したことである。大分県中津競馬を皮切りに、地方競馬が次々と廃止されていったことは周知である。それぞれの場所で存続を求める声もあったとは思われるが、それは必ずしも大きな声にはならなかった。競馬事業に直接の利害関係を有しない一般住民にとって、競馬が必要な文化的インフラではなかったからだといわざるを得まい。輓曳競馬の存続要請運動は全く異なっていた。これまで競馬とは無縁であった市民が、競馬関係者、馬産関係者と連携して運動を担ったのである。輓馬と輓曳競馬という営みが、地域固有の資源として市民に新たに認識されたのである。

輓馬と輓曳競馬は北海道十勝地方を中心に形成された固有の資源である。これは容易に他に移転しうるものではない。それゆえ、他と競争することなく安定的

に利用しうる資源なのである。

点から線、線から面へ

2007年5月、とかち馬文化を支える会（柏村文郎理事長、以下「支える会」と略称）が輓曳競馬存続運動を担った人々を中心に設立された（8月にNPO法人として認証）。この組織は、輓馬と輓曳競馬を核として、馬に関わる人々を横断的に組織したものである。

支える会の目的は「広く国民に対して、北海道十勝に根付く有形無形の馬文化に関しての情報発信や馬が担う多面的機能の実証・普及に関する事業を行い、馬と人とのふれあいを通じた情操教育・福祉の普及・増進、馬文化の継承・振興、馬資源を活用したまちづくり・経済活動の活性化に寄与すること」（支える会定款第3条）というものである。

北海道はわが国最大の馬産地帯であることから、これまでも乗馬施設や馬を使った観光施設などが道内に点在している。また、近年ではホースセラピーや引退馬の繋養施設など様々な馬関連施設もつくられている。これらの多くは hippophile たちの個別的な努力によって営まれており、いわば点的な活動であるといっていだろう。

もちろん、個々の活動がそれぞれ全く遊離しておこなわれているわけではない。それぞれの領域ごとに、個々の活動がそれぞれのネットワークを形成しているのであるが、領域ごとに形成されたそれぞれのネットワークを地域活性化という概念で接合しようという試み、すなわち線から面への展開はこれまで必ずしも十分ではなかった。

サラブレッド生産地帯である北海道日高地方では、札幌大学岩崎徹教授が提唱した「日高パスポート」構想や、行政主導で提案された「馬王国」プランもあったが、残念ながら必ずしもその実をあげるに至っていない。日高といえばサラブレッドである。観光客もその殆どがサラブレッドを見に来るのである。サラブレッドの生産・育成のみならず、それらをさらに地域活性化の資源として活用しようという試みそのものはあって然るべきであろうが、必ずしもそれが十分な成果を上げるまでには至っていないのである。その理由はいろいろ考え得るが、ひとつの理由として、馬に関わる諸セクターを横断的に組織する、ないしは結節さ

せる存在がないからではなかろうか。地域住民による自発的・内発的な運動を具体化させる組織の存在が必要不可欠だろうと思われる。

支える会の存在意義と果たすべき役割はまさにこの点にある。鞍馬と鞍曳競馬を核として、乗馬、ホースセラピー、さらには農耕文化の伝承など、様々なところで馬に関わる活動している hippophile たちが、馬による地域活性化という目的で結集し、点または線としておこなわれている活動を面的な活動に拡大していく可能性をはらんでいる。支える会は hippophile たちと hippophile 予備軍的な市民で構成されている。これまで様々な活動をおこなってきた人々が馬とのつながりをもつことで、新しい馬の活用が生まれる可能性もある。写真は9月23日に支える会によっておこなわれた馬耕まつり2007の風景である（斎藤友香氏撮影）。

むすび

産業動物としての役割を終えたわが国の馬は、国・自治体のテラ銭稼ぎの道具としての競馬に活路を見出して今日に至っている。だが、今日、馬をめぐる情勢は再び変わりつつあるように思われる。

乗馬、ホースセラピー、そして観光資源として、競馬と馬肉以外の馬の用途が展望を切り開きつつある。もちろん、現段階において、競馬と馬肉が最大の馬の用途であり、それらに比べればその他の用途は微々たるものといわざるを得ないかもしれない。冷静に見れば、競馬と馬肉以外の道が前途洋々というにはほど遠いというべきかもしれない。

「娯楽の多様化」というのは、馬券の売上高の減少に対して地方競馬の主催者が等しく口にする常套文句であるが、問題は「娯楽の多様化」なるものをあたかも免罪符のごとく唱える競馬主催者にある。はっきりいえば、「娯楽の多様化」なるものに対応することこそが主催者に求められていたはずであり、それに対して何の対応もしなかった無策をまづもって恥じるべきであろう。

長い歴史のなかで蓄積されてきた馬に関わる技能や技術、そしてそれらを体現している人たちを簡単に切り捨てることが容認されているのだろうか。むしろ、彼らに蓄積した技能・技術を、「娯楽の多様化」に対応させて地域の資源として広く活用することがまづもって考えられるべきではなかったのだろうか。競馬に

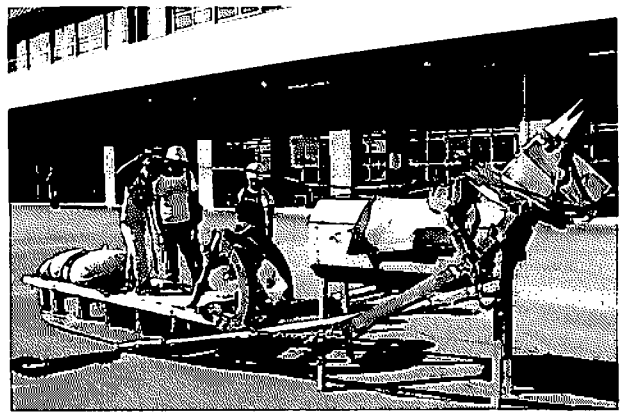


図1 ホゾリで遊ぶ子供たち



図2 蹄鉄づくりの実演



図3 農耕馬の物語「赤べえ」の紙芝居

限らず、hippophile たちが個別分散的に蓄積してきた力を糾合し、地域活性化の資源として活用することが重要である。

その意味で、支える会の誕生はひとつのモデルケースとして大いに注目しうる。誕生して間もないNPO法人であるから、その活動が試行錯誤的な段階にあるのは当然である。だが、馬と馬文化を地域活性化のため

の資源と位置づけた活動の基本方向はこれまでになかったものである。hippophileたちとその同伴者たちに大いなるエールを送りたい。

【付記】

NPO 法人とかち馬文化を支える会は広く会員を募集している。支える会の活動状況や入会に関しては支える会のサイト (<http://umabunka.com/>) をぜひご覧いただきたい。

編集後記

謹んで新春のお慶びを申し上げます。今年もゆっくり、のんびり、平和で幸せな年でありますことを願いたいものです。昨年は、様々な分野の方々から原稿を頂き予定通り年4刊発行できました。今年は31号から始まりませんがHippophileの編集方針を変えずにウマ文化や自然科学等の情報を皆様に発信できるよう編集委員一同知恵を出し合いながら頑張りますので、宜しくご指導ご鞭撻をお願い致します。

馬事往来での新木美絵氏の「馬と歯と人間の大事な関係」は、30号に続く連載記事ですが主に歯の疾患について図や写真を使い解り易く記載しています。長山昌広氏の「ウマ大国は“やっぱり”土佐だった」は、よくここまで調べ上げたものだと思嘆するくらい土地のウマ文化に長けた高知の獣医さんの記事でした。北見の競馬と高知の競馬に関わったとする者を知っていたら是非メールしてあげて下さい。古林英一氏の「[馬力]による地域活性化」は、鞍馬競馬存続運動で活躍した者が中心となり最近“NPO法人とかち馬文化を支える会”を立ち上げ、馬文化を地域の資源として活用して行こうとする内容です。田中義朗氏の「ミニホースの会」は、東京農工大学の学生さん達がこの会を通してさまざまな社会貢献を地域で行っている内容と会の設立に関わった大野夫妻の紹介、そして更に一歩進め乗馬療法や障害者乗馬への挑戦やアップル・サイダーの繁殖、普及も行っている紹介記事です。子供達がウマと触れ合う機会のすくなくなった昨今、是非このような活動が盛んになることを期待したい。

特別記事の「世界のドラフトホース」は、柏村文郎氏の7回目の連載になりますが、今号にはハンガリー、海外編集編および日本の農用馬について寄稿頂きました。内容的には完結に近いかたちになっています。

総説の「馬インフルエンザ —36年ぶりの本病の発生に遭遇して—」は、今川 浩氏に今年の夏に突如発生した馬インフルエンザについて専門家以外の読者にも理解できるように分かり易く解説的に寄稿頂きました。インフルエンザウイルスは、A、B、Cと3種ありウマはA型に属し鳥類が起源のウイルスで、ウマからヒトやイヌに感染する可能性は完全否定をすることは出来ないが有り得ないということでした。一安心です。今回の発生は日本への輸入馬により持ち込まれたウイルス（フロリダ亜系統に属する）の可能性が高いが中規模に済んでいるのはワクチン接種の効果であり、しかも重症馬の出なかったのは細菌感染処置が同時になされたかららしい。これらは、今川氏を中心としてJRAの栃木支所が丸丸となって日頃から調査研究をしてきた成果（例えば開発した迅速診断キッドでウイルスを特定し適切なワクチン接種につなげる）によるものでしょう。

編集委員と担当者の変更をお知らせします。佐藤美子氏（写真家）が退任され、新しく三浦暁子氏（エッセイスト）になりました。また、Hippophile担当のアイベック中村珠美女子に代わって外山理恵女子になりましたので旧来同様会員の温かいご指導を宜しくお願い致します。

(兼子樹廣)

入会申し込み方法

下記宛にお申し込み下さい。入会申込書をお届けします。年会費は5,000円（国内）です。

日本ウマ科学会事務局

〒320-0856 栃木県宇都宮市砥上町321-4

競走馬総合研究所内

電話 028-648-5099 FAX 028-647-0686

Hippophile, No. 31, 2008

2008年1月発行

<http://www.equinst.go.jp/JSES/>

編集委員長：兼子樹廣

発行者：小川 諄

〒320-0856 栃木県宇都宮市砥上町321-4

競走馬総合研究所内

電話 028-648-5099 FAX 028-647-0686

郵便振替口座番号 00130-3-539393

加入者名 日本ウマ科学会

足利銀行本店 普通口座 3483253

口座名義 日本ウマ科学会一般 会長 小川 諄

印刷者：有限会社 アイベック

〒170-0002 豊島区巣鴨1-24-12

電話 03-5978-4067